

令和6年度東京都広報コンクール 映像部門 総評

高橋委員

2024年度（令和6年度）の広報コンクールに応募された33の番組や動画を見つけた感想です。

全般的には広報の「情報性」が強調されていて、「作品性」（企画性）にこだわった作品は少なくなった印象です。その情報性と作品性とそれを表現する「技術」とが三位一体でバランスの取れている番組・動画がやはりこの映像コンクールでの理想ということになります。

振り返ると2024年もやはり世界各地での戦争拡大、政治的な紛争、トランプ大統領の再登場、気象環境の悪化や食糧難、経済的混乱が続きました。しかも、それを巡る情報合戦、フェイクニュース等のコミュニケーションの分断も蔓延し、私たちにとっての情報の大切さを否応なく知ることになっています。正確な情報を自らが選択をする必要性があるのです。一方、今や主流になったYouTubeやTikTok等で配信された数多くの情報は、所謂インパクト最優先で、一瞬でどれだけ目を惹くかが勝負になります。Z世代に代表されるSNS世代の若者層はコンテンツを三倍速で視たりして情報を識別します。この時流の動きに発信側がおもねってしまうと情報はますます先細りして、それを視る者を「情報」自らが選ぶような逆転現象が起きて、結果として世代間の分断につながっていく可能性があります。昨年年末の「NHK紅白歌合戦」が意外と評判良かったのも、世代横断的に出演者のバランスがとれていて楽曲もよく選び抜かれていました。この様にこれからは分断を助長するのではなく、広報映像は世代間の融合を目指して演出・制作していくべきだと思います。その上で、基本は情報をそのまま出すだけでは人は認知はするが感動しない、感動を伴わない情報は結局伝わらない、という定理を思い出すことだと思います。

さて今回の評価ですが、極端に振り切らずに「三位一体」になるべく近いバランスの番組・動画を高評価にさせていただきました。「残菜をなくそう！」ということから「美味しい給食」を目指す、生徒も一緒になった運動を紹介した足立区の番組は無理のない演出で、少子化に歯止めのかからないこの時代に大きなヒントを与えてくれました。江東区の「深川七不思議」も巧みなMCと相まってエンタメ性十分な番組、調布出身の武者小路実篤の人となりをすごろくで追っていくという楽しい企画もありました。墨田区はコロナ禍後5年ぶりに国技館で行われた5000人の「第九の復活」ドキュメントで気を吐きました。江戸川区は1945年3月10日の大空襲を数々の証言で立体的に見せてくれました。

短尺でもワンテーマで無理がなく最後までスムーズに視聴できるものもありました。評価の基準のテーマは、ある種の「感動」に視る者が至るかかどうかという点です。来年度もこの点だけは逃さずに存分にチャレンジしていただくことを期待しています。

高木委員

初めて審査員として参加させていただき、このような機会をありがとうございました。

各区市町村の広報皆さまが、毎年試行錯誤しながら、作り続けているのが、まず素晴らしい活動と思いました。

住民の方々に知ってもらうことはもちろん、外部の方、さまざまな方の目に触れるものとして、意識して作られていることがわかる映像も数多く、映像作りの意識というものが、高まっているように思いました。

自主制作も数多くあり、映像を身近に持たれている区市町村の方々も多くなっていることがわかりました。

伝えるということだけでも、大きく2つに分けても、

「情報」を誠実に伝えることを意識している映像。

「情報」+エンタメ性、見る人を魅了することを意識している映像。

その中に、表現幅、ジャンルがたくさんでしたので、

評価が難しい部分もありましたが、

どの映像にも共通して言えることは、「伝えるアイディア」を感じることができたことだと思います。

私が評価として大切にすることもこの「伝えるアイディア」がどのくらい持っている映像になっているかを見させていただきました。

押し付けにならず、見る側を考えながら作られているか。

ここを基準として評価をさせていただきました。

今回ですが、上記の考えの中で、

「あだちの“おいしい給食”～宇宙人くん、日本一のヒミツを知る～」を制作された足立区の映像を評価いたしました。「給食の残菜」という、SDGs 観点も持ちつつのテーマ選びがまず良いと思いました。好評だった過去映像の設定を活かしながら、そのフレームを使い、新しい情報発信をするという素晴らしいアイデアだったと思います。子供達が演技することで、見やすく、わかりやすくもなっており、とてもエンタメ性の高い映像でした。「江東ワイドスクエア 深川七不思議」こちらも、評価させていただきましたが、見ている人に興味を持ってもらえそうな、テーマ探しがどちらもとても上手くできたことが、高評価につながったと思います。他にも応募して下さった映像それぞれ、評価点、今後の伸びしろを感じるポイントなどもありましたので、「伝えるアイデア」ここが一番大切なポイントとと思いますので、こちらを意識しながら、来年度もさらに見ている人に何か残せる映像作りにチャレンジしていただきたいと思っております。